

ボップの比較文法と言語有機体説

——マラルメの言語論についての覚書 (IV) ——

高 橋 達 明

ボップの『サンスクリット語の動詞活用体系について—ギリシア語, ラテン語, ペルシア語, ゲルマン語のそれとの比較』は1816年に刊行された¹⁾。この書は標題の形式からして, シュレーゲルの『インド人の言語と知恵について』(1808)を踏襲したもので, それにならって, サンスクリットのテキストから『ラーマヤナ』の一挿話の韻文訳その他を付している。しかし, この標題はまた, 著者の関心が古代インドの「知恵」から「言語」の文法の比較研究へと重心を移していることをも明らかに示している。ボップは比較研究の目的を第一章「動詞一般について」の末尾近くで, 次のようにまとめている。

この試論の目的は, 古代インド語の動詞の活用において, 関係規定が語根のさまざまに対応する変化によって, どのように表現されるか, 抽象動詞 *verbum abstractum* が, 時として, どのように幹綴 *Stammsylbe* と融合して一つの語となるか, そして, 幹綴と助動詞が動詞の文法的機能を, どのように分担するかを示すことであり, また, そのことが, いかにギリシア語にも当てはまるか, ラテン語では, 語根と助動詞との結合の体系がいかに優勢になったか, それによって, ラテン語の活用とサンスクリットとギリシア語のそれとの見かけの相異が, いかに生じたかを示すことであり, 最後に, サンスクリットに由来しているか, あるいは, ある共通の母にサンスクリットともども由来している言語のすべてにおいて, いかなる関係規定も, その祖語と共通でないような屈折によっては表現されないこと, 見かけの特異さが生まれるのは, 幹綴が助動詞と融合して一つの語に

なるためか、または、分詞から、すでにサンスクリットで通例になっている派生時称 *tempora derivativa* が導き出されるためにすぎないことを証明することである。[CS. 8—9]

まず、標題に見える諸言語の類縁性の証明が目的ではないことがわかる。「印欧語」はシュレーゲルの著書によってすでに確定した事実である。少なくとも、ポップはそう受け取っている。この前提に立って、それらの言語に共通している、動詞の語形変化の特異な様式、すなわち、屈折と呼ばれる様式の起源をさぐるものが当面の課題である。諸言語の *Identität* はこの研究によって一層明らかになるであろうが、関心はさしあたってそこにはなく、屈折の起源を、サンスクリットの動詞の体系についてまず分析し、それを比較の梃子にして、他の同系言語の活用体系の分析をおこなうことに向かっている。そして、引用文が示すように、ポップは、サンスクリットの動詞の関係規定（主として、時、人称、数）は二種類の構成法によって表示され则认为している。一つは、「語根のさまざまに対応する変化」、広く言いなおせば、幹綴（語幹の音節）の内部の変化によるものであり、もう一つは、幹綴に抽象動詞（助動詞）が付加されて、一つの語に融合するという構成法である。これらの構成法を明らかにすることが屈折の起源をきわめることに他ならない。このとき、屈折という様式は「共通の母」である祖語 *Ursprache* にまでさかのぼることになる。ポップがここで「印欧祖語」について、サンスクリットか、あるいは「ある共通の母」という曖昧な表現を選んだのは、シュレーゲルに追随しているからで、1816年の時点ではなお、シュレーゲルの主張に対して全体として明確な反論をするにいたっていない。

というのは、前稿の覚書（Ⅲ）に述べたように、シュレーゲルは言語を二つの類型に区分して、一方を *organisch*、他方を *mechanisch* と呼んだが、前者、屈折語の特性が「語根音 *Wurzellaute* が変化し、屈折する」ことであり、後者（非屈折語）のそれが「語と小辞 *Partikeln* の付加によって組み立てられる」[SWI. 149] ことである以上、ポップの構成法の第二のものは屈折というカテ

ゴリーに属さないはずだからである。しかし、ポップがこの問題点に言及するのは、1820年、ロンドン留学中に英語で発表した、1816年の著書を改訂増補した論文（以下、改訂版という）においてにすぎない。そこには、シュレーゲルの言語類型論を要約したあとに、次のような行文が見える。

しかし、私が氏の意見に賛成できないのは、氏が言語を二つの部類〔有機的言語と機械的言語〕に分けると、その言語がもっぱら第一の方法〔屈折〕をもちいるのか、あるいは、第二の方法〔接辞の付加〕をもちいるのかという想定にもとづいて、区分をおこなうことである。このとき、サンスクリットとその語族の言語は、第二の方法をもちいることは決してないと想定されて、第一類に数えられることになるが、私の考えるには、二つの方法は両方ともに、すべての言語の形成に際して、おそらく中国語だけを除いて、採用されており、また、第二の、意味をそなえた接辞をもちいる方法はすべての言語において顕著に見られるものである。〔AC. 20〕（鉤括弧内、筆者。以下、同様）

いま、この第二の方法を、1816年版の第二章「古代インド語の活用」のアオリストの節に見える動詞 *śru*（聞く）の活用を例にとって説明すれば（ポップのアルファベット表記は現行のものに変える）、語根 *śru* はアオリスト、一人称、単数形で *aśrausam* と変化する。語の構成は *a-śrau-s-am* である。語頭の *a-* はアオリストのオーグメントで、過去を表す。*śrau-* は *śru* の母音交替 (*Vṛddhi*)。-*s-* は *s* アオリストの型にもとづく挿入で、語根に加えられて、語幹 *śraus-* を形成する。-*am* は第二次人称語尾 (*P.*, 一人称単数) である。ところが、ポップの考えによれば、構成は *a-śrau-s-am* ではなく、*a-śrau-sam* である²⁾。では、-*sam* は何かといえば、語根 *as*（ある）の過去 (*Impf.*)、一人称、単数形 *āsam* の語頭の *ā-* が脱落した形であるとされる。ポップは長母音 *ā* (= *a + a*) の脱落について、他の事例を示したあと、こう述べている。

だから、As が、ある動詞と結合する場合に、語根の A を落とすのは驚くにあたらない。オーグメントの A が省かれざるをえないこともすぐ理解される。なぜなら、時の関係はすでに幹綴の内部構成によって示されているからであり、助動詞には、人称と数のみを表示することがふさわしいからである。[CS. 19]

したがって、aśrausam は、抽象動詞 as のしかるべき語形変化が接辞 Affix として語幹に付加され、一つに融合して、ようやくできあがった語形であり、アオリストでは、「時の関係が、まさに有機的に auf reine organische Weise、語根の内部の屈曲によって表されたあと、人称と数が、付加された助動詞の変化によって決定される」[CS. 18] ことになる。それは、シュレーゲルのいわゆる有機的言語の形成にも、機械的言語の形成の方法が使用されていることを意味する。もちろん、シュレーゲルのよく認めるところではない。屈折は語根の有機的成長である。接辞の機械的な付加ではない。他の言語ならいざ知らず、サンスクリットは有機的言語の華である。サンスクリットの形成に機械的な方法を認めるようでは、シュレーゲルの類型論は崩壊する。この崩壊をめぐって、1816年のポップには、いささかの逡巡があったかもしれないが、少なくとも1820年には、自己の論理の行く先を十分承知していたはずである。B. Delbrück の指摘するところでは³⁾、ポップの「理論」は後のいわゆる膠着理論 'agglutination theory' の先駆である。そして、これが大切なところだが、こうして探究されているのは、屈折という様式の起源であり、aśrausam について言うなら、s アオリストの起源である。起源に対する執心。それがポップの比較文法を染めあげている色合いである。ポップは、言うまでもなく、人称語尾について熟知している。決して文法の暗い森をさまよっているのではない。上の引用文の文体が揺らいでいるように感じられるのは、現在の知識を前提として見るからで、実は、自信と確信の表出と受け取るべきものであろう。1820年には、すでに、サンスクリットとその同系言語の語根を単音節と見る考えに立って、こう書いていた。

シュレーゲル氏は一般に文法的屈折と呼ばれるものの起源の探索になんら入っていない。〔中略〕氏がもしこれをする気になっていたなら、こうした屈折の大部分が単に付加された小辞にすぎないことは、氏の平素の聡明と深い思索をまぬがれえなかったにちがいない。〔中略〕その構成要素〔語根〕が単音節である言語において、私が可能と考える唯一の真の屈折は、母音の変化と、重複とも言われる、語根の子音の繰り返しである。この二つの屈折の様式はサンスクリットとその同系語で最大限に使用されている。〔中略〕サンスクリット文法はきわめて多様な時制と法を含んでいるが、その一部は構成によって、一部は屈折という手段で作られる。

〔AC. 21—22〕

そして、この信念の色合いはついに褪せることがない。というのは、ポップの主著たる『比較文法』初版の第四分冊（1842）のアオリストの説明は、上に述べた、語形変化の構成法についての見解をそのまま引き継いでいるからである。そこでは、まず、サンスクリットの七種のアオリストのうち四種（s, sa, iṣ, siṣ アオリスト）がギリシア語の第一アオリスト（語幹に $\sigma\alpha$ を加える）にはほぼ一致するとしてから、次のように記している。

第一アオリストに一致する四種の形式はすべて語根に s を置く。直接にか、あるいは結合母音の i を介して。私はこの s に、それはある条件のもとで ś となるが、実質動詞 Verbum substantivum を認める。アオリストの第一型〔サンスクリットの〕は実質動詞の過去 (*Impf.*) にぴったり一致している。ただし、âsam などの â は失われ、三人称複数形では、語尾 us が an に、sus が âsan にかわる。â の消失を不審に思うにはおよばない。そこには、オーグメントが含まれているからである。〔中略〕オーグメントの脱落のあとに残る短母音の a は、合成による負担のために、一層容易に失われることになる。〔VG. 792〕

いまは、『比較文法』に蓄積された膨大な知見をわずかにかいま見たにすぎないが、ポップはこのような構成法を、サンスクリットについては単純未来、複合未来、祈願法、ギリシア語については未来、アオリスト、ラテン語については、接続法過去、等々と次々に見出してゆく。サンスクリットの語根 *bhū*（なる）も屈折語尾の形成にあずかっている（たとえば、ラテン語の完了）。すなわち、ポップの比較文法の成果の核心をなす部分である。そして、ここには、屈折の起源をもとめる執拗な理論的関心の持続をうかがうことができる。ポップは「理論」の点から見ると、前代の伝統の継承者であった。18世紀は、語源学と言語起源論の盛行が示すように、起源の探究をわが事とした世紀である⁴⁾。

この伝統は、他方では、抽象動詞（実質動詞）についてのポップの考え方にもはっきりと姿を現している。それによれば、動詞の機能は主語と述部を連結して、両者の関係を表現することにあるので、もっとも狭い意味では、繫辞 Copula としての抽象動詞 (*esse, sein...*) の機能に集約される。このとき、存在（実質）の概念は、当然、たとえば *homo est mortalis* という命題で、*homo* の存在を表しているのは動詞 *est* ではなく、主語の *homo* であるというように、度外視され、抽象動詞はまさに *abstrakt* な、意味を欠いた語として、連結という文法的あるいは論理的機能だけを果たすことになる。先の例に明らかにように、ポップはこのように抽象化された繫辞を屈折の第二の構成法の接辞すなわち付加される要素の一つの起源と見なしているが、1820年には、さらに、次のような考えをも示すにいたっている。

ギリシア語、ラテン語、等々の構造と似た構造をもつ言語はこの種の動詞一つによって論理的命題の全部を表現することができるが、その動詞の特徴的な機能である、主語と属辞の連結を表現する *part of speech* は一般的にまったく省略されるか、含みにとどめられる。ラテン語の動詞 *dat* は *he gives* ないしは *he is giving* という命題を表現するが、*t* の文字が三人称を指示して、主語となり、*da* が *giving* という属辞を表現している。

そして、文法上の繫辞は含みにとどめられる。動詞 *potest* では、繫辞が表現されていて、*potest* は三つの必須の *part of speech* を一身に兼ね備えている。*t* は主語、*es* は繫辞、*pot* は属辞である。[AC. 23]

ここで注意しなければならないのは、「理論」が事実在先立っていることである。そして、ポップはこの理論を、前代から盛んにおこなわれていた、ポール・ロワイヤル文法に淵源する哲学的文法の著作から学んだらしい⁵⁾。命題は文であり、主語、繫辞、属辞は文の部分である。他方で、文の部分 *partes orationis* は品詞であり、動詞は品詞の一である。では、繫辞と動詞の関係は、どのように定められるのか。当時の、おそらく、このような品詞論に対するポップの答えは明瞭で、すべての動詞は構成要素として繫辞を含んでいるというものである。引用文の例を見ると、*potest* (<*pote-*, *adj. n. sg. potis* [possible] + *est*) が *esse* を含んでいることは語の出自からして当然だが、*dat* のほうは問題である。原文は、*and the grammatical copula is understood* と微妙な言葉を使っているが、事実としては、繫辞が見られないということで、ポップがそれを *generally entirely omitted or understood* と書いているのは、すでに理論を立てたからには、省略と言う以外に考えようがなかったからであろう。引用文にすぐ続く節では、「時制のあるものは実質動詞を含んでいるのに、あるものはそれを拒んだか、あるいはもともと使用していない」という事実を説明するのに、「読者は、なぜ、すべての動詞がすべての時制において複合した構造を示さないのかと問いたくなるだろう」が、「この実質動詞の欠如を、彼はおそらく一種の省略 *ellipsis* と見なすだろう」[AC. 23] と述べている。これは、Delbrück が指摘するように、自説の開陳を読者にかこつけたもので、理論の先行が生み出した誤りと評されても致しかたがない。

ところで、*potest* の *-t* は印欧共通基語にさかのぼる人称語尾である。いま C. Watkins の *Proto-Indo-European: Comparison and Reconstruction* から非幹母音型の動詞の人称語尾(能動、単数)の対照表を引けば⁶⁾,

	IE.		Vedic		Greek		Early Latin	
	第一次	第二次	第一次	第二次	第一次	第二次		
1	*-mi	*-m	-mi	-(a)m	-mi	-n	-o	-m
2	*-si	*-s	-si	-s	-(s)i	-s		-s
3	*-ti	*-t	-ti	-t	-ti(Dor.)	-t		-t

ラテン語の三人称単数形の人称語尾 *-t* を、ポップのように主語の表示と見たすのは、なるほど、誤りかもしれないが、*m*, *s*, *t* のこれだけの一致を目にして、その由来あるいは起源に考えをめぐらせない人がいようとは思えない。事実、印欧共通基語 (IE.) の人称語尾が上のように再建された。そして、人称のカテゴリーは印欧語のもっとも早い時期にすでに符号をもっていたこと、双数形と複数形の語尾は、ここに掲げた単数形から構成されたこと、第二次語尾のほうが成立が古いこと、第一次語尾の接尾辞 *-i* は、時制が動詞体系の一つのカテゴリーとなったときに、第二次語尾の人称の符号に付加されて、現在時制に適用されたこと、したがって、*-m*, *-s*, *-t* がもともとの人称語尾と考えられること、等々が明らかになっているとされる⁷⁾。

ポップが *m*, *s*, *t* の一致に注目し、その由来をさぐったことは言うまでもない。1816年の著書は「人称の符号」の起源について明らかな説を述べていないと、Delbrück は書いているが⁸⁾、実は、「補遺」の章に、「これまで本書で人称の符号と呼んできた文字が、実際は、代名詞であることはもはや疑いようがないと私には思われる。それはすでにギリシア語、ラテン語から推測されたことだが、古代インド語の知識がそれを、私の意見によれば、確実なものとしている」〔CS. 147〕という一節があり、続けて、代名詞起源説を略述している。それによれば、一人称の *m* はサンスクリットの人称代名詞の一人称単数形 *mam* (*Ac.*), *mae* (*D.*), *mat* (*Ab.*) から語尾変化 *Endbiegungen* を落とした形であり、ついで、三人称の *t* は同じくサンスクリットの指示代名詞 *tad-* の

男性単数形 *tam* (Ac.) その他の変化形から *t* を残した形である。最後に、二人称の *s* については、記述が簡単すぎて、わかりにくいですが、まず、「二人称の代名詞は *tu* である」とあるのは、サンスクリットの二人称代名詞単数形主格の *tvam* の *tu-* を指すようである (*tvam* は *tuam* から [VG. 467])。ついで、*t* は単独で二人称の符号となり、動詞に添えられるが、そうすると、*t* が三人称と二人称、両方の人称語尾となるので、区分のために、二人称では、*t* が *s* に変わったということらしい [CS. 147—151]。このとき、*m*, *s*, *t* が現在の意味での *-m*, *-s*, *-t* でないことは当然予想されることだが、ポップがどういう考えであったかは、1816年にも、1820年の改訂版でもはっきりしない。後者には、アラビア語学者 E. Scheid (1742—1795) の説を援用した、ギリシア語が代名詞をつかって動詞の人称を構成するというような簡単な文章が散見するだけである。*m*, *s*, *t* 自体の記述はかなり詳しいが、人称語尾の由来について系統立った説明は見られない。しかし、『比較文法』第三分冊 (1837) では、次のように、第一次語尾のほうが起源的に古く、その母音が弱化して、第二次語尾が生まれたと述べられている⁹⁾。

一人称の語尾の起源については、私は *mi* を、サンスクリットとゼンド語で、語幹として、単一の代名詞〔一人称代名詞〕の斜格の土台になっている音節 *ma* の弱化と見なしている。*dadâmi* [語根 *da*] の音節 *mi* とそのもとの形 *ma* との関係は、ラテン語の合成語 *tubiCIN (-cinis)* の *i* と真の語根形 *CAN* とのそれと同じである [*tubicen* < *tuba* + *cano*]。第二次語尾は *mi* の *m* へのさらなる弱化に起因する。この弱化は、それがヨーロッパの姉妹言語と驚くべく一致していることから明らかなように、太古のことではあるとしても、やはり、言語有機体 *Sprach-Organismus* がそのあらゆる部分で生氣に満ちあふれ、花を咲かせていた、あの時代には属していない。私は、少なくとも、私たちの語族の少年時代にすでに二通りの人称語尾があったとは思わない。時がたつにつれて、ある箇所では、まず、前の部分の増加（オーグメントの過去時称において）あるいは内部へ

の挿入（可能法あるいは願望法において）が引き金になって、語尾のすり減りの過程が進んだものと推測している。すり減って丸くなった語尾〔複数〕がゆっくり広がっていったことは、ラテン語では、すべての複数形〔一人称〕がまだ *mus* で終わり、ギリシア語でも *μεν* (*mes*) で終わるのに、サンスクリットでは、対応する形の *mas* は第一次語尾に残っているだけで、そこでも、第二次語尾で通例となった *ma* へと短縮する形を示している。〔VG. 633〕

これは、後述するように、ポップが Sprach-Organismus という言葉にどういうイメージを抱いているかをよく示した、非常に特徴的な一節である。印欧祖語の太古の時代には、一通りの人称語尾しかなかった。それは言語有機体が *in voller Gesundheit* にあったからである。母音の「弱化」は起こりようがなかった。Schwächung は、母音のゼロ階梯化と子音の弱音化の現象をさす言葉と思われるが、用語としてなお熟さず、ここではなおさらのこと、メタファーとして働いている。すなわち、有機体は、有機体であるがゆえに、しだいに衰弱する。そして、これも太古のことではあるが、語幹の部分的変化、たとえば、オーグメントの *a-* (Gk. *ε*) の付加や願望法の *-ī-* (Gk. *ῑ* または *ιη*) の挿入という変化に呼応して、人称語尾の「すり減り」あるいは弱化の過程が進行する。こうして生まれたのが、第一次語尾と第二次語尾の対立である。ポップは一人称語尾の「すり減り」について、まず複数形では、もっとも起源的な語尾 *-mas* が、とくにサンスクリットで、*-mas* と *-ma* とに枝分かれしてゆき、単数形については、さらに複雑に、*-mas* > *-ma* > *-mi* の過程をへて、*-mi* と *-m* とに分かれてゆくと考えている。かくして、その後の印欧言語学の知見とは反対の結論に達したわけだが、注9) でふれたように、それが今日もなお蒸し返されることがあるのを考えてみても、ポップの弱化説、この独自の音声理論と代名詞起源説との結合の産物が、当時として、精緻をきわめたものであったことがわかる。

さて、この過程は有機体の成長の結果と見ることもできるはずだが、引用文

では、やはり衰弱のイメージが強い。そこで思い出されるのは、シュレーゲルの有機体説である。すでに覚書（Ⅲ）に述べたように、この人もまた、有機的言語の「美と屈折の技法」は「日常の使用とともに磨滅し、徐々に、あるいは一気に失われる」[SWI. 143]と考えていた。機械的言語が進歩の傾向をもつのに対して、有機的言語は頹落の傾向をもっている。しかし、先にもふれたごとく、ポップは早くからシュレーゲルの有機的言語のカテゴリーを踏み越えていた。『比較文法』第一分冊（1833）の「語根について」の章にも、やはり、次のような行文がある。

F. v. Schlegel は、屈折を語根音の内部の変更か、外部からの付加と対置された、語根の内部の変化と考えている。しかし、ギリシア語で、 $\delta\omicron$ か $\delta\omega$ から $\delta\acute{\iota}\delta\omega\text{-}\mu\iota$ [私は与える], $\delta\acute{\omega}\text{-}\sigma\omega$ [私は与えるだろう], $\delta\omicron\text{-}\theta\eta\sigma\acute{o}\mu\epsilon\theta\alpha$ [私達は与えられるだろう] が生まれるとき、 $\mu\iota$, $\sigma\omega$, $\theta\eta\sigma\acute{o}\mu\epsilon\theta\alpha$ の形は、外部からの明らかな付加でなくて何であろうか。語根の内部はまったく変わっていないか、母音の量が変わっただけではないか。[中略] われわれがサンスクリットの同系言語の屈折に認めるのは、語根の内的な屈曲ではなく、みずから意味をそなえた要素である。そして、これらの要素の起源を立証することが科学的な文法の使命 Aufgabe der wissenschaftlichen Grammatik である。しかし、この屈折のただ一つについて、その起源を確信をもって知ることがたとえできなくても、だからといって、外部からの付加による、文法の構成の原理が確実でなくなるわけではない。[VG. 110—111]

そうすると、フリードリッヒの二分法から兄のアウグスト・シュレーゲルの三分法にいたって、ひとまず完成する言語分類もまた変更されざるをえない¹⁰⁾。ポップが引用文のあとに提示する分類はアウグストの三分法、1. 文法構造を欠く言語（単音節語）、2. 接辞をもちいる言語（膠着語）、3. 屈折をもつ言語（屈折語）にそのまま従っているが、印欧語を3から2に移してい

る。つまり、分類の内実を変えている。したがって、ポップは、一見したところ、アウグストの「私の思うに、屈折語に第一の地位を指定しなければならない。それらは *les langues organiques* と呼ぶことができよう。発展し、増大する、生きた原理を蔵しているからであり、それらのみが、こう表現してよければ、豊かに実りある成長作用 *végétation* をもっているからである」¹¹⁾というような、もともとフリードリッヒのロマンティズムに由来する、印欧語の格別の価値づけを拒否しているように思われたいではないが、実際は、そうではない。そこで、ポップの分類を見れば、まず、第一のクラスは「単音節の語根をもち、構成の能力を欠き、したがって、*Organismus* のない、文法のない言語」で、文法のカテゴリーは裸の語根の文中での位置によって見分けられる。このクラスには、中国語が分類される。

第二は、単音節の語根をもつ言語で、構成の能力をそなえ、ほぼこの手段だけで自己の *Organismus* と文法を獲得している。語の創造の主要原理は、このクラスでは、それぞれが語のいわば魂と身体の実現である、動詞の語根と代名詞の語根とを結合することにあると私には思われる。このクラスには、サンスクリットと同系言語が入り、また、他の言語も、それが第一と第三のクラスに属さないで、語形をもっとも簡単な要素に還元することが可能であるような状態に保たれてきているかぎり、すべてここに入れられる。〔VG. 112—113〕

第三のクラスは、二音節の動詞語根と、基本の意味の担い手として不可欠な三つの子音とをもつ言語であり、文法形式はもっぱら語根の内部の変化によって生み出される。これに分類されるのはセム諸語だけである。それに続けて、ポップはアウグストに追随して、こう書いている。「われわれは、サンスクリットの語族のほうがセム語族よりもずっと優れていることを喜んで承認する。しかし、その優れているところは、それだけでは意味の欠けた音節をもちいる屈折の使用にあるのではなく、文法にない、真に意味をそなえた、そして、

個々に使用されている語と同系である付加語の豊富と充実にある。」[VG. 113] ポップはここで、例によって、屈折という言葉シュレーゲル兄弟の定義に従ってもちいているが、両者の優越性の主張は、印欧語は屈折+接辞の付加で屈折語であるという後世に流布した分類をもちだすまでもなく、一つ穴のムジナである。もっとも、ポップの考え方は三分法の固定化をかえって防いだのかもしれない。とくに、第一、第二のクラスの言語の語根はともに単音節とされるから、膠着という言葉はいま使用されてはいないけれども、単音節語から膠着語への言語変化という歴史的発展の可能性を含んでいると言える。ポップが膠着理論の先駆者と呼ばれるゆえんであろう。

ここで注意したいのは、ポップが先行する一文で *naturhistorische Classificirung* という表現をもちいていることで、先の引用文にある「科学的な文法の使命」という一句を、これに対置すれば、Wissenschaft の内容が自然の記述と分類（博物学）から自然科学へという進歩の一般的図式において把握されていることがわかる。言語の Organismus という発想がこの歴史の図式に微妙に関係していることはすぐ予想できるが、そこへ赴くまえに、シュレーゲル弟の類型論を根本から覆すことを「使命」としてきたポップの考え方に、organisch という観念とそれにまつわる諸観念がどのように入ってきたのかをざっと見ておくなら、それは、やはり、シュレーゲルを経由してのことであったのを、1816年の第一作が示している。たとえば、本論のはじめの部分にすでに引用した一文にも見えるように、「語根の内部の変化」は organisch という語で形容されることがしばしばである。そして、第一章の末尾では、サンスクリットの活用体系に精通して、ギリシア、ラテン、ゲルマン、ペルシアの諸語のそれを比較研究する必要を説いてから、次のような展望でもって、章の結びとしている。

それによって、われわれは諸言語の身元 Identität を確認し、同時にまた、単一の言語有機体が緩やかに段階を追って壊れてゆくことを認識し、そして、その有機体を機械的な結合によって、そこから、結合の諸要素が

もはや見分けられなくなったとき、一つの新しい有機体の外観が生まれることになった、そのような機械的な結合によって補うという傾向を観察するであろう。[CS. 11]

ポップはここでシュレーゲルの用語をもちいて、シュレーゲルの思想を語っている。両者の差異があるとすれば、この Sprachorganismus は「印欧祖語」を指すように受け取れるということだけであろう。そうすると、「新しい有機体」の内容はサンスクリットを含めた「印欧語」となって、それがたとえ見かけ上の有機体であっても、有機体の更新という歴史的過程を、比較研究は現実的に「観察する」ことになる。これは、やはり、「有機的」と「機械的」を峻別するシュレーゲルの考え方を乗り越えていると言わなければならない。ともにロマンティズムの風潮の中にありながら、ポップの歴史感覚はシュレーゲルのそれとはかなり異なっているように思われる。ポップは「有機的」に発する諸観念は確かに受け入れているけれども、祖語の措定に関しては、自己の感覚を信頼した。実際、1820年の改訂版では、サンスクリットは祖語とは見なされていない。そして、「印欧祖語」に当たる *one original tongue* について、はっきりした言及がある[AC. 15]。しかも、organ に由来する語彙はまったく使用されていない。つまり、上の引用文に類する議論は見られないということである。そこには、明らかな留保がある。それは、おそらく、拒絶ではない。というのは、シュレーゲルの例の一節、「比較文法」という言葉の使用によって名高い文章が冒頭の部分に引かれているからである。この短い文には、周知のように、比較解剖学が登場する[SWI. 136]。Organismus は、英語によるこの版では、比較解剖学という自然科学の一部門の名の下にひとまず身を潜めたわけである。その理由は当時のイギリスの Philology の一般的性格をはじめとして、さまざまな推測をすることができるが、シュレーゲルとの関係について言えば、これが、後年、科学的文法の使命を説くことになるポップの、先輩との折り合いのつけかたなのであろう。ポップはすでにサンスクリットと比較言語研究の専門学者としての地歩を固めつつあったことが思い合わされる。

ポップが1827年に発表し、1836年に一書とした、グリムの『ドイツ文法』の書評の冒頭に、次のような文章があるのを、A. Morpurgo Davies が引用している。筆者にはなお未見の書物だが、本論の文脈からして、いかにも注目すべき内容である。幸い、注に原文をのせてあるので、その全文を訳しておく¹²⁾。

諸言語は有機的な自然物と見なされなければならない。それらは一定の法則に従って自分を形成し、ある内的な生命原理をみずからに担いながら、発展し、そして、しだいに死滅してゆく。しだいに、自分自身をもはや把握できなくなって、本来は意味をそなえていたのに、ますます外面的な塊になり変わった成員あるいは形式を取り去ったり、ばらばらに崩したり、悪用したり、つまり、それらを、自己の起源からは適切でなかった目的に使用したりしながら。

これだけの文脈では確実なことは言えないけれども、この *organische Naturkörper* は、いったん自然科学の淵に潜み、そこから浮上したにしては、メタファーの衣を纏いすぎているという印象を否めない。しかし、他方では、法則、生命原理といった語彙は、それが科学の洗礼を受けたことと示すものであろう。引用文の後半は、さきほど引用した1816年の文章に見える、言語の *mechanisch* なありかたに対応するように思われるが、その言葉を使用していないことから判断すれば、ポップは1820年の沈黙をへて、ここでようやく、有機的と機械的の対立を止揚した有機性の概念を自己の立脚点として表明したのだと読むことができる。それは、この時点から振りかえれば、すでに1816年の文章にも、おぼろな影を透かして見せているもので、ただちに『比較文法』初版、第一分冊(1833)の「序文」に結ばれるはずである。なお、筆者が「ここで」とするのは手もとの資料の制約のためで、1827年という年次にこだわるわけではない。

ポップは「序文」を、こう書き出している。

私が本書で意図するのは、標題に掲げた諸言語の *Organismus* の記述、すべての類似を一つにまとめて、比較する記述であり、それらの物理的、力学的法則と、文法的関係を指示する形式の起源との研究である。語根の神秘、つまり原概念の命名の根拠のみには、触れない。たとえば、語根 *I* はなぜ、行く、を意味し、立つ、ではないのか、*STHA* あるいは *STA* という音声のまとまりはなぜ、立つ、を意味し、行く、ではないのか、といったことは調べていない。私は、さらに、言語をいわば生成において、そして、その発達の経過において追求することを企図している。それも、説明を越えていると自分で決めこんでいることを明白に知らされるのを好まない人々でも、本書には、あるいは、いま述べた意図から当然予想されるほどの不快をおぼえないかもしれないようなやり方でもって。たいていの場合、原意味は、したがって、文法的形式の起源は、われわれの言語をめぐる視野の拡大によって、そして、数千年来、お互いに切り離されていたにもかかわらず、なおも紛れようのない家族的特徴をわが身に帯びている一族の姉妹たちを対照することによって、おのずと判明する。[VG. iii—iv]

話はこうしてサンスクリットの「発見」と印欧語族の同系性に移ってゆくが、ここで考えなければならないのは、*Organismus* の内実であり、ついで、言語の物理的、力学的法則とは何か、さらに、後半部に見える「不快」云々は、どう理解すればよいのかということであろう。

まず、最後の点から取り上げると、説明を越えていると自分で決めこんでいること *das von ihnen für unerklärbar Gehaltene* という句が世間一般の事柄を言っているとは、どうも思えない。あるいは、筆者の考え違いかもしれないが、「説明できない」のは、信仰にかかわることである。それは、「いま述べた意図」が、直接には、言語を生成において追求するという意図を指していることからわかる。ポップは、自分は言語の生成を扱うけれども、それは印欧語の歴史の経験的な方法による研究であって、神の業を問うようなところに踏

みこむものではない……と言いたいのではないか。

次に、die physischen und mechanischen Gesetze について。『比較文法』第二版のブレアル訳（第一巻、1866）はこの箇所に注を付して、おそらくブレアルの質問への返事と思われる、以下のような、ポップの通信を掲載している（仏文）。

力学的 *mécaniques* な法則によって、私が理解しているのは、主として、重力の法則 *les lois de la pesanteur* であり、とりわけ、人称屈折語尾の重さが、先行する音節におよぼす影響である。もし、私の見解に反して、ゲルマン語の活用における母音の変化が文法的な意味をもつことをグリムとともに認めるなら、そして、たとえば、ゴート語の過去 *band*（私は縛った）の *a* が、現在 *binda*（私は縛る）の *i* と対立して、過去の表現と見なされるなら、この *a* は動力学的 *dynamique* な力に恵まれていると言うことが許されるであろう。物理的 *physiques* な法則によって、私が指示しているのは、他の文法規則、とくに音声法則である。だから、サンスクリットで、*ad-ti*（語根 *ad*, 食べる）でなくて、*at-ti*（彼は食べる）と言うと、*d* の *t* への変化は *une loi physique* に起因する。[GL. I. 1]

ブレアルは1855年、高等師範学校を出、1857年から1860年までベルリン大学に留学して、ポップのもとで比較文法を学んだ人である。A. Meillet の伝えるところでは、*esprit positif* の持ち主であった¹⁸⁾。比較文法をフランスに導入するについて、新しいシュライヒャーではなく、古いポップを選んだのも、明確な考えがあってのことである。訳者にこの人をえなければ、ポップのこのようなコメントが巻頭におさまることはなかったにちがいない。そこには、*perspicacité* の働きがある。少なくとも、たとえば、*mechanisch* がもはやシュレーゲルの用語でないことは、これではっきりする。そして、重力の法則が何であるかも。問題は命名にはない。力学的という訳語をつけてみても、だいたい、重力が掛け詞の類にすぎず、その縁語が力学である。*physisch* も同じよ

うなもので、「序文」の終わりのほうには、言語を「対象」として扱って、その Physik と Physiologie を提示したいと、抱負を述べているのも、命名の問題にすぎない。物理学あるいは生理学の内容は、引用文にあるように、音声法則である。生理学は言語の生命 Sprach-Leben の縁語にすぎない。ただし、Leben のほうは、当然 Organismus に関係するから、もっと根の深い言葉であるにはちがいない。「一族の姉妹たち」とか「家族的特徴」とかという縁語的表現は、そこから生まれてくる。さらに、言語の解剖学 Sprach-Anatomie という言葉も使われているが、それはシュレーゲル以来の修辞の伝統のようなものである。解剖 Zergliederung というのはポップの好きな言葉であったが、要するに、語根と接辞の腑分けであり、言い換えれば、名詞の曲用と動詞の活用起源を語の体内に分け入って分析するための方法ということである。総じて、ポップのこの種の言葉遣いは恣意的であり、その場の思いつきという印象をあたえることが多い。しかし、意図は明確である。言語の比較研究、この新興の学問を文献学から独立させて、科学すなわち自然諸学に伍する資格と地位を見出してやること。それがポップの目指すところであった。

ともあれ、重力の法則について簡単に見ておくなら、法則は二つあるようだが、重要なのは母音交替 Ablaut にかかわるほうで、ポップの上の言葉で言えば、「人称屈折語尾の重さが、先行する音節におよぼす影響である」。重さは母音の重さで、サンスクリットには、音節中の母音の重さ、軽さの区別があり、区別のための規則がある。重い音節は聴覚的な弁別性をそなえているらしい。簡単な規則を例にあげれば、長母音は重く、短母音は軽い。しかし、ポップの言う法則はそれとは異なっていて、印欧語の基本の三母音であると考えられている a, i, u について、母音それ自体が相対的な重さをはじめから付与されているというものである。つまり、a がもっとも重く、i がもっとも軽く、u は a と i の中間に位置する [GC.I. 35]。それは e, o (長母音を含めて) についても認知される現象であるが、言語によってそれぞれ差異があり、規則性が低い。ギリシア語では、通例、ε は i よりも重い。ε と o の相対的な重さについては、述べられていない。そして、ギリシア語はサンスクリット、

ラテン語、ゲルマン語ほど母音の重さに敏感ではないとされる。

母音の相対的重さの判定がどのようになされるかという点、たとえば、*L. abjicio* (投げ下ろす) は *jacio* (投げる) に *ab-* が接辞として付加された語であり、それが *abjacio* にならないのは、*-ji-* によって、語根の加重が軽減されるからである。そういう解釈を前提として立てておけば、いまや、*a* と *i* の軽重を決定することができる。重力の法則はこのような事例をある程度集めて、抽出された規則性であろう。それがともかく規則的であるのは、今日では、母音の重さではなく、後続する音節のアクセントの働きによって説明できると考えられているようである。

ポップがみずから発見したと書いている、この法則の重要性は、第一に、動詞の母音の変化を人称語尾の重さによって説明できることであり、したがって、第二に、グリムがアプラウトと名づけた現象の理解にかかわってくる点である。『比較文法』第三分冊(1837)は「人称語尾の重さの影響」の節をもうけているが、その冒頭に、人称語尾の重さがサンスクリット、ギリシア語、ゼンド語では、先行する語根に全面的な影響をあたえることを述べたあと、こう書かれている。「軽い語尾の前では、しばしば、拡張〔幹綴の〕が見られるのに対して、重い語尾の前では、それは取り消される。言いかえれば、いくつかの不規則動詞において、語根の全体が維持されるのは軽い語尾の前にある場合だけで、重い語尾の前では、短縮が起こる。」[VG. 694] いま、有名になった例をあげれば、Skt. *as-mi* (I am): *smas* (we are), Gk. *δίδω-μι* (I give): *δίδω-μεν* (we give) のごとくである。ゲルマン語の強変化動詞のアプラウトについても、たとえば、E. *bind* (縛る) の Old E. *bindan* (inf.): *band* (pret.): *bunden* (p. p.) の母音の交替は、人称語尾の母音を、もっとも重い *a* から、*a* — *e* — *u* — *i* — ゼロと軽くなってゆく系列にあてはめて、語幹の母音と対照すれば、説明できることになる。ポップによれば、この *a* は語根の本来の母音であって、*i* が変化した形ではない。*band* がサンスクリットの語根 *bandh* (縛る) と対応していることが、その根拠(の一つ)である。したがって、ポップは、さきほどの注の文章にもあるように、*a* を現在の *i* に対立する過去の標識

とする、グリムの見解に反対する。「語根の母音 a が現在時称で i に弱められたのであって、逆に、i が過去時称で a に強められたのではない。」[VG. 849]

要するところ、ポップは印欧語の母音体系を、サンスクリットの三母音を基礎にして構想していたから、アプラウトの現象をギリシア語の母音体系を柱として全面的に把握することができなかった。しかし、かくのごとき詳密な事例の枚挙と理論の試行錯誤とがあって、ようやく、口蓋音の法則 *Palatalgesetz* が発見され、青年文法学派のソナント仮説が次々に生まれてきたこともまた、事実として、忘れられてはならない。

物理的法則については、ポップのいわゆる好音調の法則 *Wohllautgesetz* がそれに該当する主なものであろう。「耳に心地よい音」は言語変化の動因であると考えられているが、それが心理的にではなく、物理的あるいは生理的に把握されているのは、一見、数十年ののちに成立する音声学に通じた発想であるように見えるが、音声学がそこから生まれることはなかったはずである。

また、ポップと印欧語の音対応の研究の関係については、それが比較文法に不可欠であるのは、グリムの子音推移の研究、興味深いことに、この成果をグリムの法則と命名したのは余人ならぬマックス・ミュラーらしいが、この法則の威力によって一目瞭然であるけれども、ここでは細部に立ち入る余裕がないので、Delbrück が例の「音法則に例外なし」の立場から、ポップの「法則」に対する態度をめぐって、おおむね、次のようなことを指摘しているのを要約するにとどめる¹⁴⁾。すなわち、サンスクリットの d はギリシア語の δ に対応するが、他方では、*duhitar*: $\theta\upsilon\rho\acute{\alpha}\tau\eta\rho$ (娘) のように、 θ にも対応する。そこで、規則はひとまず例外を認めて、d は普通 δ に対応するが、 θ に対応することもしばしばあるというところに落ち着くが、問題はこの先で、この例外を生み出している原因をあくまで追求するか、それとも 'usually and often' に満足するか、そのどちらかということになり、ポップの場合には、後者である、と。

さて、言語有機体の内実の問題に帰らなければならない。ポップの有機体説がシュレーゲルのその受容にはじまったことはまちがいない。シュレーゲルは、覚書(Ⅲ)ですでに述べた自然学の進歩の一般的図式、それは19世紀初頭

の生物学の成立によって端的に描きうるものだが、それを原動力の中核にはらんで、大きな潮流を形成しつつあった哲学的ロマンティズムの立役者の一人である。ポップの学生時代の恩師 Windischmann はポップの後援者として1816年の記念すべき書物を出版し、緒言を寄せた人だが、やはりロマンティックのサークルの一員であった。ポップはこの知的環境から出発して、比較文法という専門性の飛躍的に高い学問分野へと歩を進めて、インフィニティブの名詞起源説〔CS. 37—〕のごとき画期的な新説を提示するにいたるが、時とともに、シュレーゲルの言語に関する理論形成の方法と成果を疑い、1820年にはすでに、その言語類型論を排して、独自の見解を築くにいたっていた。しかし、その独自の見解の中に、言語有機体の概念は残った。あるいは、新たに甦った。遅くとも、1827年には。そして、ついに、『比較文法』にもその姿を現すことになる。本論がこれまで追いかけてきたのは、その折々の経過である。では、この概念は、ポップの比較文法の理論的あるいは実践的布置において、どのように把握されているのであろうか。

まず、『比較文法』の先に引用したポップの言語分類の文中に見える Organismus, 第一の中国語のクラスは Organismus のない、文法のない言語、そして第二の印欧語を代表とするクラスは、語根は単音節ながら、自己の Organismus と文法を獲得していると言われるときのこの用語は、ひとまず、体系 System と同義と考えて差しつかえない。二つの言葉のあいだのつながりに、文法を置けば、等位の関係はいっそう明確になる。機能主義の言語学において、体系と呼ばれるのは、一つの集合を形成しているそれぞれの項が集合内部の環境に適応して変化し、均衡を維持している、その集合である。そこで、例を一つあげるなら、ポップの最初の著書の出版百年を記念し、その間の比較文法（歴史比較言語学）の成果を総括して、言語学に新しい地平を切り開くという敢為な意図を潜めて、1916年に、Bailly と Sechehaye が刊行したソスュールの『一般言語学講義』にも、有機体は体系と肩をならべて、登場してくる。そして、学生たちの筆記ノートを見れば、ソスュールが実際の講義で, organisme という言葉を、その言語学史上の悪しき含意の働きを忌避しながら

も、système の代わりに使用したことがわかる¹⁵⁾。Verburg が結論的に述べていた通り、ポップは rationalist である。しかし、多年にわたる諸言語の比較研究の研鑽の経験が機能主義的な言語の見方を育んで、ロックに発し、啓蒙思想を流れて、フンボルトにもいたっているとされる機能主義の伝統に眼を向けさせるということがあったのではないだろうか¹⁶⁾。さらに、いつの時点かはわからないけれども、ポップがこのような Organismus の概念をえるもとは、A. Morpurgo Davies が指摘しているように¹⁷⁾、カントの『判断力批判』の第二部第一篇の文章であろう。それはポップのフンボルトとの親しい交友からも首肯されるところである。付け加えれば、キュヴィエの『比較解剖学講義』の有機体論もまたカントの目的論を源泉の一つとすることは、覚書(Ⅲ)ですでに論じた。

しかし、ポップの有機体説が言語の体系という理論的抽象ですっぱり割り切れないことも他方の事実である。先に引用した、人称語尾の起源についての一節を思い出せば、そこでは、Sprach-Organismus が太古の世の明るい光を浴びて、生氣に満ちあふれ、花を咲かせていた。そして、それは、時とともに、有機体が衰弱してゆくことの先触れでもあった。あたかも樹木の枯死を思わせるような、語尾の弱化、すり減り。言語は有機体であるがゆえに、変化をとげ、死滅する。ポップがこう表現するとき、それをあくまでもメタファーであるとは言い切れないように思われる。『比較文法』には、organisch と unorganisch を分類の指標として対立的に使用している箇所がいくつかある。たとえば、印欧語の母音について、a, i, u は有機的、e, o は無機的という具合に。ブレアルは unorganisch に注を付して、原初的でない母音を指すと言っている [GL. I. 41]。そうであれば、原初的、起源的なものが有機的であることになる。そのような言葉遣いを先までたどれば、やはり、言語は起源の自然状態から追放され、変化を重ねて、頹落してゆくことになるであろう。ポップが比較文法の専門家であることはもちろんである。この新興科学の旗手は印欧語の錯雑をきわめたデータに立ち向かい、科学にいう規則性を洞察して、それを軸に、一つの語族の言語変化の統一的な記述を完成しようとする。

けれども、なぜ、言語は変化するのかという問いをあくまで問うことはしなかった。変化の動因は話す主体としての人間である。しかし、言語を科学の対象として扱おうとするかぎり、個人あるいは群衆の意識、民族あるいは国民のエートスという不安定な心理的要因は、排除されて当然である。Morpurgo Davies はポップの有機体の概念の重要性を認めようとする研究者であり、言語と有機体の同一視によって獲得されたのは、言語の自立的研究の正当性と言語変化の理由の説明であるという意味のことを述べている¹⁷⁾。これはいかにも卓見であり、Verburg のいうポップの科学主義とも齟齬をきたさない。しかし、この科学主義には、上に述べてきたような含みがある。筆者としては、ポップの言語有機体説の根を、もう一度、歴史は頹落するという伝統的な時間のパラダイムに搦めとられながら、形而上的熱情と現実的諦念とを激しく交錯させて、心と精神との相剋に立ち向かっていたロマンティズムの哲学の土壌の中にあえてさぐってみたいという気がする。

(juillet-septembre 2002)

略号 (VI)

- CS. : Bopp, F., *Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache in Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen und germanischen Sprache*, Frankfurt, 1816 (Repr., Olms, 1975).
- AC. : Bopp, F., *Analytical Comparison of the Sanskrit, Greek, Latin and Teutonic languages, shewing the original identity of their grammatical structure*, London, 1820, newly edited by K. Koerner, Amsterdam, Benjamins, 1974, pp. 14—60.
- VG. : Bopp, F., *Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Griechischen, Lateinischen, Litthauischen, Gothischen und Deutschen*, Berlin, 1833—1852 (Repr., 2 vols, Routledge, 1999).
- GL. : Bopp, F., *Grammaire comparée des langues indo-européennes*, traduite sur la deuxième édition et précédée d'une introduction par

M. Bréal, 4 vols, Paris, Imprimerie impériale, 1866—1872.

註

- 1) Franz Bopp は1791年マインツに生まれ、アッシャフェンブルクのギムナジウムに学び、講師の K. J. H. Windischmann (1775—1839) と知り合った。この人はマインツ選挙侯カール・フォン・エアタールの宮廷医師で、カール大学の設立とともに教授として博物学、哲学、歴史を講じていた。元来、ヘルダー、シェリングの徒で、神秘主義的傾向をもち、東洋の文学と宗教に関心が深い。1818年、ボン大学教授。多くの著書の中に、世界史の進歩過程についての哲学体系の第一部として刊行した『東洋哲学の原理』(1827—1834)がある。ボップがシュレーゲルの書(1808)を知って、東洋の諸言語の研究に向かったのはこの人物の影響による。1812—1816年、パリに留学し、Silvestre de Sacy のもとでアラビア語、ペルシア語、ヘブライ語を学んだ。サンスクリットについては、Chézy の講義に出たとも言われるが、本人は独習と書いている。1815年には、A. Schlegel にサンスクリットの手ほどきをした。1816年、Windischmann の肝いりで CS. を刊行。1818年、ロンドンに留学し、サンスクリット学者 Ch. Wilkins (1749—1836), Th. Colebrooke (1765—1837) に学んで、東インド会社所有の写本の研究をおこなうかたわら、CS. を改訂して、AC. を英語で発表した。他方、『マハーバーラタ』の一挿話のテキストをデーヴァ・ナーガリー文字で、ラテン語訳を付して出版している (*Nalus, carmen sanscritum...*, London, 1819)。これはこの文字を活字に組んだ、ヨーロッパで二冊目の本である。1821年、ロンドンでサンスクリットを通して親交を結んだ Wilhelm von Humboldt の推輓によって、ベルリン大学東洋文学・言語学一般科目担当員外教授に就任。以後、比較文法の専門学者として順調な経歴をへて、1864年、退職、1867年、CS. の出版五十年の翌年に、ベルリンで逝去した。主著、VG. (1833—1852)、同第二版 (1857—1861)のほか、『サンスクリットとその同系言語の比較解剖』(1824—1826)、『サンスクリット批判文法』(1834)、『母音体系あるいはグリム文法批判』(1836)、『マライ・ポリネシア諸語・印欧語同系論』(1841)、等々。

ボップの伝記と書誌については、Bréal, M., Introduction, in GC. I, pp. i—lvii. Guigniaut, J. D., Notice historique sur la vie et les travaux de M. François Bopp, 1869, in AC., pp. xv—xxxviii. Koerner, K., Franz Bopp (1791—1867), in *Practicing linguistic historiography*, Amsterdam, Benjamins, 1989, pp. 291—302. S. Lefmann の『ボップ伝』(1891—1895)は未見。

「比較文法の創始者」をめぐる近年の論説については、Cf. Morpurgo Davies, A., Language Classification in the Nineteenth Century, in Th. Sebeok, *Current*

Trends in Linguistics, Hague, Mouton, 1975, pp. 623—624. 同じ論者の *Nineteenth Century Linguistics*, London, Longman, 1998, pp. 129—136.

なお, VG. の英訳, *A Comparative Grammar of the Sanscrit, Zend, Greek, Latin, Lithuanian, Gothic, German, and Slavonic Languages*, 4 vols, London, 1845—1853, Reprint in 2 vols, Hildesheim, Olms, 1985 は, マラルメの知人の言語学者 J. Girard de Rialle の1870年1月28日付けの書簡に, 「いま 'le premier volume d'une *Comparative Grammar of Sanskrit Greek and Latin*' を Maisonneuve で売っている。これはまったく良い本だ」 (*Documents Mallarmé*, VII, p. 377) と見える本であろう。Marchal, B., *La Religion de Mallarmé*, Corti, 1988, p. 129 の推測を参照。ただし, マラルメがこのポップをパリに注文して, 入手したか, しないか。それは不明である。

- 2) ポップはオーグメントの a の起源を欠性辞の a と見なす。動作あるいは性質の存在, すなわち, 現在の否定。Cf. AC., pp. 32—33. VG., p. 781—784.
- 3) Delbrück, B., *Introduction to the study of language*, New edition by K. Koerner, Amsterdam, Benjamins, 1989, pp. 61—62.
- 4) 屈折語尾の形成についても, Jespersen, O., *Language—its nature, development and origin*, London, Allen & Unwin, 1923, p. 49 が指摘しているように, John Horne Tooke (1737—1812) の『翼ある言葉あるいはパーリー歓談』に見える試みがある。*Epea pteroenta or the Diversions of Purley*, 2 vols, 1786 & 1805, Reprint of 1829 ed., London, Routledge, 1993. ホーン・トゥックのロック批判に立つ言語論は, 切りこみが非常に鋭いもので, 著者の人物ともども, 筆者の関心をひくが, いまだ味読のいとまを見出さぬことを遺憾とする。
- 5) Verburg, P. A., The background to the linguistic conceptions of Bopp, *Lingua*, vol. II, 1, 1949, pp. 438—468 は, 科学の自己批評という観点から, Voraussetzungslosigkeit の権化とふつつ見なされてきたポップの比較文法が前提としているはずの思考原理を洗いなおす, 先駆的な試みであり, シュレーゲル兄弟とグリムのロマンティズム, フンボルトのカント主義, オランダのギリシア語学というように, 当代, 前代の知的風潮をつぎつぎに検討の対象として, ついに, ポップの思考形式がライブニッツの数学的合理主義にもとづく言語理論と対応することを見出して, それをポップの科学主義の源泉とする。当面の論点である, フランスの哲学的文法については, 抽象(実質)動詞の論理的な働きについてのポップの説が, その師シルヴェストル・ド・サンの『一般文法の原理』(1799)に一致することを, 引用によって指摘するが, 両者の言語把握の基本的な相異を重視して, 両者の照応を認めていない。
- 6) Ramat, A. G. & Ramat, P. ed., *The Indo-European Languages*, London, Routledge, 1998, p. 60. ラテン語はこの表に出ないので, Vineis, E., *Latin*, in

Ibid., pp. 300—301 の記述により補った。それによれば、ラテン語は初期に人称語尾の一次、二次の区別を失っている。

- 7) 以上のまとめは、Lehmann, W. P., *Theoretical Bases of Indo-European Linguistics*, London, Routledge, 1993, pp. 172—173 の記述による。注 9) 参照。

- 8) Delbrück, *Op. cit.*, pp. 6—7.

- 9) 泉井久之助「印欧語二題」アジア・アフリカ言語文化研究所通信10号, 1970, 8, pp. 5—10 は「附記」で、印欧語の動詞の二種の人称語尾の区別について、その区別は印欧語にはじめから存在し、そのまま維持されてきたものであるとして、誤った見方、すなわち *-i* が語末の発音の弱化によって脱落したとする、K. Brugmann (1849—1919) によってとくに正されたはずの誤謬が、時として、現在も見られることを指摘する。これは、服部四郎「語尾の弱化—印欧語の語尾に言及しつつ」言語の科学 1 号, 東京言語研究所, 1970, 1, pp. 1—7 (英語原文は, *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 25, 1969, pp. 143—148.) が、二次語尾は一次語尾の弱化によって成立したと「結論する」(能動態・単 1・2・3, 複 3, 中間態・単 2・3, 複 3 について) のに対する「注意」である。服部論文は、さらに、一次語尾の *-mi*, *-si* には、人称代名詞が「弱まった形である可能性」を認め、*-ti* は指示代名詞の「語幹に多少類似」するとも述べている。この弱化説と代名詞起源説はポップの説に等しいけれども、ポップの名は見えない。ともあれ、すでに本文でふれたように、今日の印欧言語学では、一次語尾は二次語尾より新しく、二次語尾 + *-i* と考えられているが、それは、次のような推論による。印欧語の成立期あるいは前印欧語 (palaeo-IE.) の動詞体系では、アスペクトが時制に優先し、時制はまだ存在していなかった。その名残りが、サンスクリットの指令法 *Injunctive* である。そこでは、指令法の用法はすでに限定されているが、印欧語の後期には、法、時制にこだわらず、願望法にも、過去にも未来にも用いられていた。したがって、たとえば, *bharat. Inj.* [*<abharat. Impf.* (彼は運びつつあった) *Inj.* の語尾は、当然ながら, *bharati. Pres.* (彼は運ぶ) と *-t/-ti* の対立を示している] の再建形 **bheret* は人称、法、態を表わすけれども、時制は表現しないと見るなら、現在形の **bhereti* (>*bharati*) は **bheret* の *-t* に, *hic et nunc* を表わす標識 *-i* が付加されて、成立したと考えればよいことになる。それは、すなわち、第一次語尾の成立である。そして、その後, **bheret* には, *illic et tunc* を表わす標識 **e-* (Skt. *a-*, Gk. *e-*), つまりオーグメントが付加されて、直説法の過去時制、願望法などに使用された。それによって、印欧語のいわゆる第二次語尾の機能が決まったことになる。以上は、主として, Ramat, A. G. & Ramat, P., *Op. cit.*, pp. 84—88 (B. Comrie, *The Indo-European Linguistic Family: Genetic and Typological Perspectives*), pp. 116—117 (R. Lazzeroni, *Sanskrit*) の論述によったが、*-i* の付加による一次語尾の成立については、服部論文と同年に初版が出た, Szemerényi,

O., *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*, Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1970, pp. 300—302 に記述がある。そして、注に Brugmann にはじまる参考文献があげられている中に、J. Kuryłowicz (1895—1978) の *The Inflectional Categories of Indo-European*, Heidelberg, Winter, 1964 も出ている。上の *bheret/*bhereti の挙例もこの書によると思われるが、ただし、Kuryłowicz は、付加要素 -i の語源については、将来も dubious たらざるをえないだろうと述べている (p. 131)。

代名詞起源説についても、Kuryłowicz はやはり懐疑的で、人称語尾の語源は problem of secondary importance にすぎないと述べて、例の有名な言葉、Moreover, one cannot reconstruct *ad infinitum*. を記している (p. 58)。しかし、Szemerényi の本には記述があり (pp. 302—305)、ポップもはじめに名だけ出てくる。いま注目したいのは、この起源問題を印欧語の全体としての特異性の中に位置づけて解明しようとする、新しい、オリジナルな論であり、それは、松本克己「印欧語における能格性の問題」東京大学言語学論集'88、同文学部言語学研究室、1988, pp. 1—19 に見える。松本論文は、まず、印欧語の動詞のもっとも古い活用体系として従来認められてきた Perfect と中動態を取りあげて、次のような人称語尾の区別が含意している、それぞれの動詞の本来の性格に注意する。

	能 動	完了・中動
1 sg.	*-m	*-H ₂ e/o
2 sg.	*-s	*-tH ₂ e/o
3 sg.	*-t	*-e/o
3 pl.	*-nt	*-r/ro

この完了・中動語尾をもつ動詞を、十分な理由をもって、動作主の介在しない静態(状態)動詞から分化したものと見るなら、印欧語が、G. A. Klimov (1928—1997) の提唱を中心に発展してきたロシアの言語類型学にいわゆる活格(動格) *activus* 言語であったという視点が生まれることになる。そこで、活格言語では、動態活用(＝能動語尾の活用)と静態活用(＝完了・中動語尾の活用)は人称の標示を異にし、「通常、前者には人称代名詞の能(動)格が、後者では中立ないし絶対格が現れる」から、上の二種の語尾は印欧語の人称代名詞の形態的な相異に帰せられるかもしれない。すなわち、*-m, *-s, *-t については「名詞の属・能格に相当するそれぞれの代名詞の斜格形」に由来すると見なしうるであろう、という内容である。松本論文が目指しているのは、もちろん、単に人称語尾の起源をさぐるのではなく、従来議論されてきた印欧語の能格性の問題を—それは名詞の格標示の特異性に発する—、活格的な言語タイプを起源的に想定することによって説明するこ

とである。それが動詞の人称語尾にかかわってくるのは、印欧語の古いありかたでは、文の本質的な構成要素は動詞のみであって、一般に（たとえば英語で）主語と呼ばれる統語論上のカテゴリーはいわば分割されて、動作主性 agentivity が動詞の人称標示によって表現されるからである。松本論文は、もう一つの焦点となる名詞の格標示について、印欧語が対格タイプとして確立される以前の古い格組織は非幹母音型の曲用に残っていると見て、従来再建されてきた格変化を、さらに、次のように再建する。すなわち、有生名詞の主格の *-s は絶対格として、無生名詞の絶対格（＝ゼロ格）に等しく、対格の *-m は方格 allative に還元され、属格（奪格）の *-os / *-s は能格として、動詞の前記の二種の人称標示と連係して、動作主の機能を付与されることになる。そして、これらの三格は有生名詞にも無生名詞にも使用されるが、「Silverstein の名詞句階層」として知られる、名詞の有生性 animacy の階層と格標示（能格、対格）とのあいだに存在する普遍性には違反しないという検証が加えられている。

以上の二つの論点については、なお、山口巖『類型学序説』京都大学学術出版会、1995のとくに pp. 262—272 を参照。

- 10) Paustian, P. R., Bopp and Nineteenth-Century Distrust of the Indian Grammatical Tradition, *Indogermanische Forschungen*, 82 Band 1977, 1978, pp. 39—49 はポップとシュレーゲル兄との交友関係の悪化を、古代インドのサンスクリット文法家たちの業績に対する評価のちがい（前者は認めず、後者は評価する）を軸にまとめたもので、当時のヨーロッパ（とくに、ドイツ）のサンスクリット写本と文献の少なさ（たとえば、パーニニのテキストの刊行は1887年）、イギリス人の文法書、Colebrook (1805), Wilkins (1808), Forster (1810) に依拠せざるをえなかった事情、等々について述べていて、興味深い。要するに、ポップの不信はシュレーゲル一派の過剰にロマンティックな学問的主張に原因し、前者のサンスクリット研究は、この不信のために、インドの文法学を援用した歴史的な分析の方向をとらずに、structural analysis のそれに向かった。そこに、ポップの比較文法の共時論的な性質が生まれることになる。しかしながら、本稿の論点に関していえば、これには Paustian もふれるところがないが、ポップの含みの大きい言語有機体説を上記の対立で説明しきることはできないであろう。
- 11) Schlegel, A. W., *Observations sur la langue et la littérature provençales*, 1818 はなお未見で、ポップが注に引用している原文による [VG. 111]。
- 12) Morpurgo Davies, A., 'Organic' and 'organism' in Franz Bopp, in Hoenigswald H. M. & Wiener, L. F., ed., *Biological Metaphor and Cladistic Classification*, Philadelphia, Pennsylvania UP., 1987, p. 97.
- 13) Meillet, A., *Linguistique historique et linguistique générale*, tome II, Paris, Klincksieck, 1952, p. 216.

- 14) Delbrück, *Op. cit.*, p. 21.
- 15) Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale*, Edition critique par R. Engler, Tome I, Wiesbaden, Harrassowitz, 1989, p. 59. 「言語学の外的側面と呼ばれる, l'organisme intérieur de la langue に直接関係しないすべてのものは前もって取りよけておかなければならない」, 「*organisme* という用語をこういう風に使用するのには, 異議がとなえられてきた。言語 *langue* は生物には比較しえず, いつでも, 言語が依存している者〔人間〕の産物であるから。しかしながら, この語は, 言語が特別のもので, 精神の外側にあり, 独立しているという意味を含ませないで, 使用することができる」(以上, II R43)。そして, 「お望みなら, *organisme* とは言わず, *système* と言ってもよい。そのほうが良いとしても, つまりは同じことになる。だから一定義—外的言語学—言語に関わっているが, その *système* に加わらないすべてのもの」(II R49)。ソスュールの口から *organisme* という言葉がふと洩れたのは, まさに, クリオの悪戯ではないかと思われるが, ともあれ, こうして, いくつもの流れに分かれて, 十九世紀を貫流する言語有機体説の生命は, おおむね, 断たれた。*organisme* の内実が, 仮にポップをはじめとすれば, 最初と最後で大きく一致しているのは, 言語有機体説のうねりが十九世紀中葉の生物学の転換期に高まったという事実と照応している。翻って, 現代の言語学では, 言語 *langage* が脳の *organisme* という有機物の普遍的構造にあやうく吞まれかかっていることが思い合わされる。
- 16) この伝統については, Aarsleff, H., *From Locke to Saussure—Essays on the Study of Language and Intellectual History*, Minneapolis, Univ. of Minnesota Press, 1982 所収の諸篇を参照。
- 17) Morpurgo Davies, A., *Op. cit.*, 1987, pp. 94—95. この論は, Schlanger, J., *Les métaphores de l'organisme*, Paris, L'Harmattan, 1995, pp. 125—131 のような, ポップの *organisme* を *système* に同義と見, 他のニュアンスは, 時代の風に伝染した比喩的修辭にすぎないとする見方を乗り越えているし, Stam, J. H., *Inquiries into the Origin of Language—The Fate of a Question*, New York, Harper & Row, 1976, pp. 224—225 のような, ポップはロマンティズムの言語観に引き戻されるとともに, 自然科学としての言語学という観念へと押し進められているという折衷的な見方をも明らかに乗り越えている。

付記

注9)にあげた服部論文について, Szemerényi の著書の第四版(1990)の英訳は増補した注に批判的コメントを記している。Szemerényi, O., *Introduction to Indo-European Linguistics*, Oxford UP., 1996, p. 328.